



> みんなのコード

特定非営利活動法人 みんなのコード
2017 年度活動報告書 / 2018 年度活動計画書

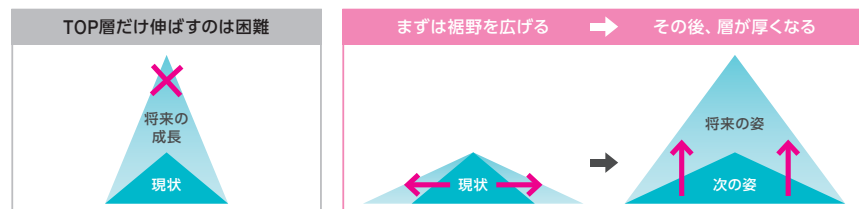
私たちのミッション

全ての子どもがプログラミングを楽しむ国にする

1 全ての子どもが

> なぜ、全ての子ども？

2020年度より施行される新学習指導要領では、全国の小学校でプログラミング教育が必修化されることが明記されています。日本の将来的な経済成長を見据えると、一握りの優秀なTOP層の人材だけを伸ばしていくだけでは、十分な人材育成ができていないとは言えない状況を改善するための大きな一歩です。そこで、みんなのコードは現在プログラミング教育を受ける機会がまだない層に対しても手を差し伸べ、裾野を広げてから厚い層を立ち上げていくことで、日本の成長を実現に近づけています。

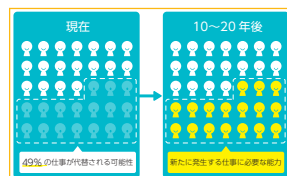


2 プログラミングを楽しむ

> なぜ、プログラミング？

人工知能 (AI) や音声認識・自動運転車をはじめとする革新的なテクノロジーによって、現存する仕事の49%が10年後には失われると言われています。小学校1学級児童数を35人とすると、17人の仕事が失われる可能性があるのです。一方で、プログラミングリテラシーは、今後生まれてくる職業の共通素養として、重要性が高まると予測されています。

そこで小学校段階から身の周りの社会システムやコンピュータの仕組みに慣れ親しんでおくことが、子どもたちの将来の可能性を広げることにつながるとみんなのコードは考えます。プログラミングのテクニックを重視するのではなく、まずは「プログラミングに触れることが楽しい」と感じてもらうことを大切にしています。



3 国にする

> なぜ、全国で？

内閣官房情報 (IT) 総合戦略室によれば、プログラミング教育の浸透は東京で先行し、大阪で1年、その他の地方でもう1年遅れて実現していくと予測されています。しかし、日本の公教育の強みである「質の均一性」を十分に活かし、地域間の情報格差・教育格差を取り除くことで日本の子どもたちの将来をもっと明るくすることができます。みんなのコードは、企業や行政を協力することにより、主要都市だけではなく全国の自治体にプログラミング教育の輪が広がっていくことを目標としています。



描く理想

「職人がすごいものを作る日本」「電車が性格に走る日本」「アニメ文化が盛んな日本」のように、子どもたちが大人になったときに「コンピューター・プログラミングで様々な課題を解決してしまう日本」が実現することを目指しています。



みんなのコードのアプローチ

みんなのコードは、企業・行政に協力していただき、学校の先生を支援することで、子どもたちへのプログラミング教育の充実を図っています。



> なぜ、このアプローチ？

プール、習字、料理など、子どもに新しいことを体験・学習させるプロである小学校の先生と協力することで、すべての子どもに「継続的に」プログラミング教育が行き届きます。また、日本では教員同士で情報を共有する文化が浸透しているため、先生が他の先生にプログラミング教育の教え方を教え、広めていくことも可能です。そこで、「具体的な授業イメージがわからない」「周りに同じ志の人が少ない」といった悩みや不安を抱える先生を積極的にサポートしています。

代表挨拶

平素よりご理解・ご支援くださっているみなさまにおかれましては、心より御礼を申し上げます。ITにより社会のあり方が大きく変わる中で、普段何気なく使っているコンピュータの存在や、その仕組みについて考えるのは、エンジニアだけの仕事ではないように思います。自身の起業を通してコンピュータへの理解を深めるにつれて、プログラミングはIT社会を生きる基礎となる力だと思えるようになりました。だからこそ、プログラミングやコンピュータ自体に触れる習慣、そして社会の仕組みについて考える想像力を、これからの社会を担う子どもたちに身に付けてほしいと、願うようになりました。日本でも2020年から小学校段階からのプログラミング必修化が決まり、義務教育の在り方が変わろうとしています。従来の「専門職教育としてのプログラミング教育」ではなく、あらゆる領域で活用されるテクノロジーを理解する「教養としてのプログラミング教育」が必要とされています。プログラミングを楽しく体験することを通じて、子どもたちは自分の身のまわりの社会に今よりずっと興味をもってくれるはずです。その上で身近な課題を自分の力で解決したいと思ってくれるような人材があふれる国として、日本を活気づけられたらと思っています。



代表理事 利根川 裕太

*1 出典 <https://persol-tech-s.co.jp/f-engineer/product/cucumber>

▶ 本年度の活動①

▶ プログラミング教育明日会議 ～プログラミング教育を、学び・体験してもらおう～



「プログラミング教育明日会議」は、小学校の先生・教育委員会の方など教育関係者に対して行われるプログラミング教育必修化を考えるシンポジウムです。国としての狙いや必修化の背景にある社会の変化から、先行して授業を行った先生の事例共有や模擬授業、教材研究、先生同士の情報交換を通して、プログラミング教育について全体感を体系的につかんでもらいます。

2017年度は、**全国10都市**で**1,000人以上の動員**がありました。
2018年度の明日会議開催も決定しており、主要都市のみならず地方都市へのいっそうの展開を計画しております。



参加した先生の声

まずは知ることから始めるべきだと思うので、もっといろんな人に参加して刺激を受けてほしい。模擬授業では具体的な授業イメージが、先行事例報告では実践の手応えが得られてよかったです。プログラミング教育に取り組める第一歩を踏み出せました。

▶ 指導者研修会 ～プログラミング教育に、興味関心を持ってもらう～



指導者研修会では、各自治体や教育委員会の要請により、その地域の小学校教員に対して集中的にプログラミング教育についての理解を深めてもらうことを目的としています。

2017年度も、全国各地で研修会の依頼があり、

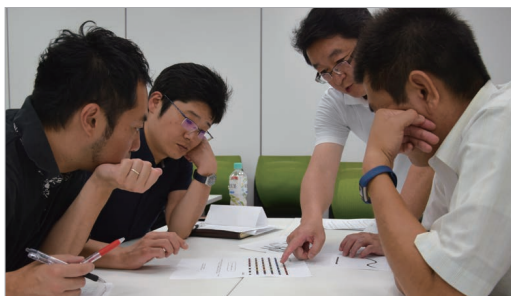
全国30都市以上で一研修あたり**平均50人以上の先生方**に参加していただき、**累計1500人以上の先生方**が参加されました。



参加した先生の声

丁寧にご指導いただき、低・中・高学年と段階を追ってどのように指導すべきかのイメージが持てました。技術の進化に合わせた教育の変化の重要性を感じると同時に、プログラミングがもっと簡単なものだ、敷居を低くしてもらったおかげですぐに学校で実践できそうです。

▶ プログラミング指導教員養成塾 ～プログラミング教育について、実際に授業をしよう～



「プログラミング指導教員養成塾」は、プログラミング教育必修化の背景を掴み、実際にプログラミングの授業を行い、周囲に広めることのできる教員の育成を目的とした通期の講習会です。少人数で開講され、講座の中では、実際に指導案を考えてもらったり、自身の学級で授業を行っていただき、プログラミング教育についてより深い理解・知見を得てもらっています。

2017年5月に始動・1月に修了した一期生は

東京で30人 同年9月に始動した二期生は、**東京・大阪・福岡の3都市で計50人**となりました。

また、2018年度には2000人のプログラミング指導教員を養成する3年計画（協働：Google.org）が控えています。

参加した先生の声

プログラミング教育の基礎を学べることはもちろん、「プログラミング教育に関する正しい知識を広めたい」「子どもたちの未来を考えた教育が必要」といった同じ思いを持った先生方に会える機会はまたとありません。

▶ プログル ～学校の授業で使えるオンライン教材 <https://proguru.jp/>



プログルはみんなのコードが監修・開発するドリル型プログラミング教材です。小学校の算数の公倍数や多角形の単元などに取り入れることができ、単元の復習はもちろんのこと、プログラミングの考え方を学ぶことができます。2017年4月14日のリリース以来、授業に特化したWeb教材として多くの児童および先生方に使用していただき、2018年2月時点で**60,000人以上の方**に体験していただきました。2018年3月現在、「多角形コース」「公倍数コース」に加えて、「平均値コース」がリリースされています。



体験した子供の声

ノートに書くよりもわかりやすかったし、楽しくできたのですごく良いと思いました。また今度やってみたいと思いました。



体験した子供の声

3と5の公倍数で15だけれど、その2倍も3と5の公倍数だとたしかめられました。公倍数を使って遊びみたいの問題を解くと楽しいと感じました。

- 実践する
- 広める

明日会議と研修会でプログラミング教育を知ってもらい、養成塾でより深めるという人的サポートと、みんなのコード開発・監修の教材プログルという技術的サポートの二つで、先生の授業実践を支援しています。

▶ プログラミング教育体験者の声

子どもたちの意欲的な姿が全てを物語る

伊那市立西春近南小学校 田中 愛 先生

県のICT研修の際の利根川さんの話を通して、みんなのコードの活動について知りました。それまでプログラミング教育についてほとんど知らなかったのですが、「実践してみたい」と思い、まずは自分の特別支援学級で行ってみました。お楽しみ会で作る「あみだくじ」をscratch.jpで作って見たところ、普段は数回ブロック（数の概念を学習するためのブロック）を「教えさせられ」ながら学習していた子どもたちが、「マスが1・2・3・4個だから、左に4つだ！」と自分が意図する動きにするために主体的かつ意欲的に学習に取り組んでいました。子どもたちのあまりにも真剣な姿を見て、プログラミング教育への大きな期待を抱き、プログラミング指導教員養成塾にも参加しました。養成塾では、志が高い先生同士で学ぶこともでき、私もさらに実践の意欲を掻き立てられました。通常学級でプログラミング教育を行っても、子どもたちの姿はやはりリキキキとしていました。特に、教師主導の一斉授業では意欲的に学習に取り組んでいました。子どもたちや友だちと関わるのが苦手な子どもたちが、意欲的・協動的に授業に参加したのには驚きました。子どもたちは口々に「考えるのが楽しかった」と答えます。普通の授業でも「考える」ことはしているはずですが、主体的に「考える」楽しさ、充実感、有用感を得られるのは、自ら課題を見出し、より意図した活動に近づけるために論理的に考えることが求められるプログラミング教育ならではの姿だと思います。次期学習指導要領改訂では、より学習者視点で学びの質、形態の変換が求められています。「プログラミングで教科を学ぶ」実践を積み重ね、子どもの学びの質を高めていきたいと思っています。



正解不正解じゃなくて、考え抜くことと自由な表現を楽しむ

学校法人神奈川学園 精華小学校 水口 翔太郎くん

僕は、「micro:bit」というセンサーを使ったプログラミング教材が一番好きです。「micro:bit」を使ってプログラミングをすると、自分の書いたプログラムが実行された時の達成感が違います。目の前でホンモノが動くのを見たり、触ったりできるのは楽しいです。プログラミングは、コンピュータゲームとは違って、何回か取り組んだことがある問題でも、考えないとクリアすることはできません。だから、間違えたところは「何でできなかったのか」ということをよく考えて、何度でも挑戦します。一発でクリアできなくてもやり方を変えればいいし、間違えてみたほうが勉強になる問題だってあります。うまくいった時も、「何でクリアできたのかを考えるといい」と先生に教わったので、考えるようにしています。自分で粘り強く考えるのは楽しいし、自分で考えないと意味がないから、友だちにやり方を聞かれた時も答えは教えません。画面に表示される問題の答えに関係なく、「もし、ここをこんな風に変えてみたら、どんな風になるのかな？」と考えてみたり、それを試したりできるのも、普通の授業ではできないことです。もっとこういう授業が学校で増えたら、嬉しいです。

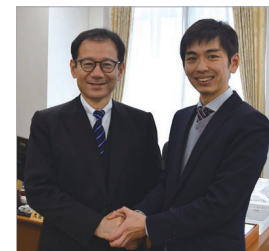


▶ 設立時からの応援者の声

プログラミングは子どもたちの自己肯定感を養うソリューション

鈴木 寛 文部科学大臣補佐官

他者に教えることで学びは本当の意味で深まる・定着するとよくいいますが、プログラミングをきっかけに他の教科での学びに子どもたちが関心を持ち、学びに対して意欲的になってくれる可能性は大いにあると感じています。さらに、プログラミングなどの新しい分野に関しては子どもが親よりも直感的に多くのことを早く学び取ることができる場合も多く見受けられます。親に本気で関心されたときの子どもの自己肯定感の高まりというのは素晴らしいものです。そういった意味でも、プログラミング教育が今の子どもたちに良い影響を与えると期待しています。教育現場においては、プログラミング教育必修化のメッセージは伝わっている一方、そのうえで実践に至るまでの具体的な解決策を示さないと、教育現場では漠然とした不安が蔓延してしまっているような気がします。2018年はこうした不安が解消され、解決すべき課題と向き合えるようになっていく年にしたいので、今取り組めることを血道に積み重ねて行くことが大事だと思っています。明日会議・養成塾・プログル開発などみんなのコードの有効かつ有意義なアクションは、文部科学省としても応援しています。



決まった答えのない課題に立ち向かう力を子どもたちに

宮元 陸 石川県加賀市長

昨今のIoTや人工知能(AI)、ロボット技術の進展には目覚ましいものがあります。こうした世界的な産業構造の変革を迎える時代に生きる子どもたちは、決まった答えのない課題に対して、多方面における観点から物事を論理的に考え、解決していく力を身に付けることが不可欠です。そのために加賀市は、他の自治体に先駆けて、子どもたちが「論理的思考力」を習得し、IoTなどの先進技術を活用することができるようにとの思いで、日々人材育成に取り組んでいます。そのためのアプローチの一つとして、加賀市内の全ての小中学校においてプログラミング教育に取り組むとともに、そのために必要な教員養成を「地域おこし協力隊」の方々で行っています。みんなのコードにおかれましては、本市とともに総務省の「若年層に対するプログラミング教育の普及推進」事業に参画いただき、その成果を大いに上げていただいております。先生方への研修やモデル授業の実施により、先生方は具体的な授業イメージと自信を持って実践に臨んでもらっています。本市の成長戦略には欠かすことのできない「人材育成」のため、みんなのコードの皆さんと一緒に、今後もプログラミング教育に取り組んでまいります。



全ての子どものあらゆる可能性に応える教育

Hadi Partovi Code.org CEO

"Learning computer science fosters creativity and opens up future opportunities for all students in the 21st century, regardless of what they dream of becoming: lawyers, doctors, entrepreneurs, designers, or programmers. Our biggest challenge right now in making computer science available to all students is that there are not enough teachers. Professional development of existing teachers with a passion for learning will be the key to bringing computer science to all students."

コンピュータサイエンスを学ぶことは21世紀を生きるすべての子どもたちの想像力を養い、将来の機会を広げてあげることで、彼らが将来就きたい職業が弁護士でも医者でも、起業家でもデザイナーでも、はたまたプログラマーになりたいと思っても、関係ありません。そのために私たちが今向き合っている最大の課題は、すべての子どもたちにコンピュータサイエンスを提供するために、学ぶことに意欲的な先生方を養成することです。もっと多くの先生方の理解を得ることが、解決の鍵となります。



▶ 本年度の活動② 外部団体との連携

総務省「若年層に対するプログラミング教育の普及推進」事業



みんなのコードは2016年・2017年と総務省による「若年層に対するプログラミング教育の普及推進」事業に参加し、北海道・新潟・神奈川の3地域において、総合的な学習の時間でも実施可能なプログラミング教育活動の実証事業を行いました。

本事業では、**3地域で23名**のプログラミング指導教員を養成し、実際に各自の学級での授業を行いました。

児童数は**3地域合計で140名**でした。

継続的なメンター育成によりプログラミング指導教員数の拡大が促され、みんなのコードを中核とする教員の連帯関係が強くなると考えています。今年度は、全国各地の小学校に適用できる授業モデルが成立したと認識しております。

子どもたちが先生に教えてあげる場面も



Hour of Code Japan 2017

～社会みんなで実現する全国プログラミング～



日本マイクロソフト 品川本社会場の様子

2017年12月の「コンピュータサイエンス教育週間」に全国各地で実施した、子ども向けプログラミング体験イベント「Hour of Code Japan 2017 ～社会みんなで実現する全国プログラミング!～」において、全国の参加者数合計がおよそ42,000名を記録しました。

同期間中に日本国内において、インターネットを通じて「Hour of Code」の無償プログラミング教材を使用した人数は、合計72,000名にもおよびます。

みんなのコードは日本マイクロソフト品川本社をはじめとする会場を運営し、合計143名の方にご来場いただきました。

政策提言の取り組み

2016年4月の「小学校段階における論理的思考力や創造性、問題解決能力等の育成とプログラミング教育に関する有識者



※ 出典：NHK

会議」に引き続き、弊法人代表理事の利根川は東京都教育委員会「高度IT活用社会における今後の学校教育の在り方に関する有識者会議」委員に就任し、行政と協力することで積極的な政策提言を展開しています。

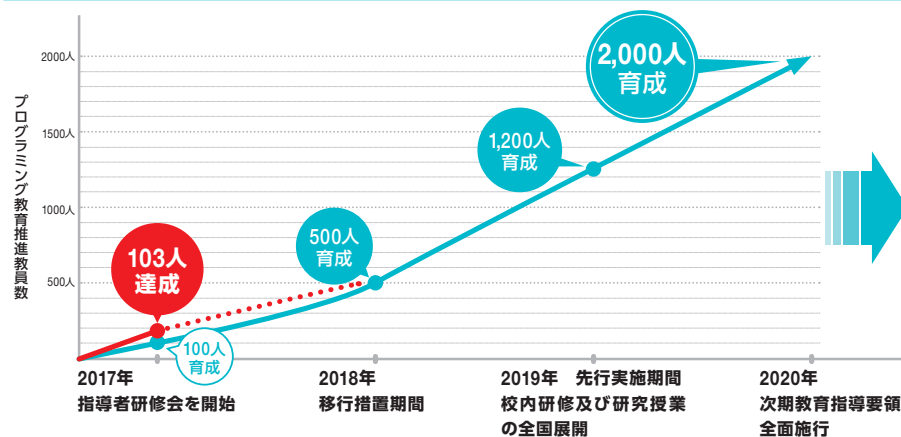
メディア掲載

みんなのコードでは、TVや新聞などメディアを通じた広報活動にも積極的に力を入れています。2017年度は、毎日小学生新聞にて「Let'sプログラミング」を連載し、プログラミングとはなんなのか、どうやったらできるのか、といった小学生を対象とした記事を執筆しております。そのほか、詳しい掲載情報はみんなのコード公式HPをご覧ください。

▶ 今後の計画

みんなのコードでは、小学校でプログラミングが必修化される2020年までに、全国2000の自治体に各1人ずつ、合計2,000人のプログラミング指導教員を育成することを目指しています。

2018年度は、Google.orgと協働し、全国でプログラミング指導教員養成塾を開講する予定です。これによって、全国650万人の小学生が、プログラミングを楽しむことができる環境を実現できます。



みんなのコード、新しい試み

▶ プロカリ <https://procurri.jp/>



プロカリとは、プログラミングを取り入れた授業を実施するために参考になる事例を集めたサイトです。掲載した事例は、どれも実際に行われたもので教科のねらいとプログラミング的思考の育成が関連付けられたものを厳選しています。先方が授業を実施する際の具体的なイメージをもてるよう、関連する指導案・ワークシート・写真などを載せています。

▶ プログル <https://proguru.jp/>

プログルでは、既存の3コースに加えて、2月に「平均値コース」をリリース、さらに順次新コースの開発を進めています。2018年も教育現場での実践を重ね、より良いソフトウェアに更新し続けていきます。詳細はみんなのコード公式HP等で発表いたします。
※平均値コース > <https://proguru.jp/course/avg/#/>

▶ 学生支部

みんなのコードでは、教養課程にある大学生、すなわちこれから小学校の先生になる世代に対してシンポジウム、勉強会を開催することで、将来的なプログラミング指導教員の早期養成を計画しております。大学同士の情報交換により、プログラミング教育に理解のある学生数を拡大していきたいと考えております。詳細はみんなのコードのHP等で発表致します。

みんなのコード サポーターの声

新たな挑戦への覚悟を応援したい

ラクスル株式会社 代表取締役CEO 松本 恭福 氏

みんなのコードの代表を務める利根川さんとは、ラクスルの立ち上げの時から一緒にいろいろなことを乗り越えてきました。独立すると最初に聞いたときは、正直寂しい気持ちもありました。しかし、彼が自分で解決したい社会課題を見つけ、新たな挑戦を決意したことはとても嬉しく、応援したいと思いました。自身の強みである課題解決能力を用い、課題解決の主体者として腹の据わった彼は無敵だと思っています。プログラミング教育を通して公教育を変えるというアプローチは、まだ活用しきれない国内の人材にチャンスを与えることだと思っています。どこの国でも親の収入とそれに伴う子の教育水準が明白に二分化している現状が伺えます。首都圏にいたとトップ層の育成に目が行きがちですが、こうした課題をすでに抱えている地域にインパクトを出さなければ、深刻な社会問題に行き着くことが見えています。プログラミング教育が広がることで、地域の活性化や社会の安定、機会の平等など、社会全体にポジティブな成果が期待できます。利根川さんはみんなのコードの活動をはじめ、さまざまな成果を出しています。これが、これに満足せず、目指す大きなミッションの達成に向けて、もっともっと大きなインパクトを出していってほしいと思っています。



新たな挑戦への覚悟を応援したい

株式会社リブセンス 大政 勇作 氏

弊社のCSR担当者から話をもらったことがきっかけで、今回、みんなのコードのイベントに協力しました。自分の得意なこと、好きなことを通じて、誰かの役に立てる機会はそれほど多くないと思うので、とても貴重でした。今回のイベントでは、子どもたちに中途半端なものを提供したくないの思いから、直感的にプログラミングの良さを理解してもらえそうなコンテンツを制作しました。これはイベント前の準備に他の社員のお子さんたちと遊ぶ中で得た感想です。プログラミングという自己表現を通して、目の前の子どもたちを笑顔にできたこと、感動体験を参加者全員で共有しながら、思い思いにプログラミングを楽しんでもらえたことが素直に嬉しかったです。子どもたちが早いうちからいろいろな職業を知って、自分の可能性や適性を探る一つの機会として、プログラミング教育があるのだと感じており、これからも、子どもたちがプログラミングに取り組むのを応援したいと考えています。「裾野を広げる」というミッションにまっすぐ向き合っている、みんなのコードの活動に共感しており、今後子どもたちと一緒に、これからの社会を考えるサポートをしたいと思っています。



新たな挑戦への覚悟を応援したい

株式会社電算 藤井 治樹 氏

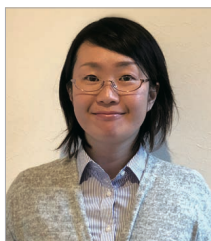
2016年夏に、息子が通う小学校で開催された「Hour of Code 夏休み全国100校1万人プログラミング」のイベントから、みんなのコードと一緒に、長野県を中心にプログラミング教育の普及を積極的に行っています。弊社は以前より、ITを活用したCSR活動として「出前授業」を行ってきました。小学校でのプログラミング教育の必修化や、子どもたちに親しみやすい教材「Hour of Code」を知ったことがきっかけで、「もっとIT技術者という職業に親しみを持ってもらいたい」と思うようになりました。以前は、「子どもたちは、技術的な話にどこまで興味をもってくれるかな?」と不安もありましたが、「ロボットを作ってみよう」「世の中が便利にできるとわかってワクワクした」といった感想がどの学校に行っても絶えません。ITを味方にすることで将来の選択肢はぐっと広がり、どこにいてもPC一つで世の中を変えられると知っているだけで、将来の可能性は更に広がります。地元で根ざした私たちとみんなのコードが協力し、全国の教育関係者の方々の知見をもとに、有意義かつ濃い情報を地元へ届けられるパートナーシップを非常に嬉しく思っています。



行政・先生との連携は課題解決の核

熊本県 渡邊 典子 氏

一昨年に地元・熊本で震災が起こり、被災して行き場のない子どもたちをケアするボランティアに参加しました。避難所で退屈そうに過ごしている子どもたちが、今あるもの、今の環境でできることを発見した時の笑顔が忘れられません。自らのスキルを活かして子どもたちへもっといろいろな可能性に気づかせてあげたいと思った際に、プログラミング教育のこと、そしてみんなのコードの活動を知りました。子どもたちの未来のために学校の先生方をフォローするというアプローチは、重要なことながら一番大変なことだと思えます。行政にも掛け合いながら必要な層のすべての人を動かそうとする姿勢をみて、本気で動いている信頼できる団体だと感じました。私にも幼い子どもがいますが、みんなのコードの活動はきっとこの子の未来にもつながります。そんな本気の活動を応援したいという思いから寄付をしました。私自身、地元・熊本で子ども向けプログラミング教育を普及する活動を始め、まわりにはプログラミング教育にポジティブな意見を持つ人が少しずつ増えてきました。みんなのコードには、ぜひこれからも学校現場を変える活動を進めていってほしいと思っています。



みんなのコードと一緒に、 日本の子どもたちの10年後を見据えた 教育を実現しませんか？

コンピュータが身近なIT社会で、プログラミングは未来を生きる子どもたちの頼もしい味方になると、みんなのコードは信じています。1人でも多くの子どもにプログラミング教育を届けるために、月1,000円からの寄付で活動を支援していただけませんか？



1,000円/月で、1校おおよそ300名ほどの子どもたちに、身近なコンピューターについて考えさせるきっかけを作ることができます。



5,000円/月で、全国どこでも1つの市区町村内も子どもたちにプログラミングの楽しさを知ってもらうことができます。



10,000円/月で、1都道府県内のすべての子どもたちに、自分で手で世の中をもっとよくなる楽しさを、体験させることができます。

私たちのミッション ▶ 「全ての子どもがプログラミングを楽しむ国にする」を実現する！

サポーター会員の登録方法

1 <https://support.code.or.jp> からサポーター会員登録

2 右のQRコードを読み取ってサポーター会員登録

プログラミングを体験した子どもの声

考えるって、
楽しい!



プログラミングで
どんなことがで
きるのか
もっと勉強してみたい!



プログラミングは自分の
考えたことを自由に表現
して試せる!

クリアするために何度も
何度も考えるのが、
たのしかった!

▶ みんなのコードは全国各地の企業さまと、 次世代のための教育改革に取り組んでいます。

みんなのコードはいろいろな企業さまからご支援をいただき、かつ他のNPOと協力することで活動に影響力を持たせています。プログラミング教育のノウハウ提供、教材開発コンサルティング、教育関係者向けシンポジウム運営などを通して企業さまと教育現場をあるべきようにつなぐ役割を担うだけでなく、プログラミングワークショップの共同運営などを行い、地域社会と企業さまをつなぐ役割も担っています。次世代のための社会貢献に力を入れている企業さまやプログラミング教育をきっかけに社会に変革を起こしたいと考えている企業様は、ぜひお気軽にご相談ください。✉ info@code.or.jp 🌐 <https://code.or.jp>

みんなのコード スポンサー



発行者 > みんなのコード

特定非営利活動法人 みんなのコード 代表理事：利根川 裕太 設立：2015年7月
東京都渋谷区渋谷3-15-2 MTステートビル5階 🌐 <https://code.or.jp/> ✉ info@code.or.jp